

<特集コラム1>

## 教員を育てる学校に

小谷健一

(前鳥取大学教員養成センター)

自分自身のことで恐縮だが、教員採用になった当初の忘れられない思い出がある。県庁での新採用の辞令交付式、それに引き続いての研修が終わり、その日のうちに赴任先の学校に行った。校長室で辞令を提示し挨拶をした後に、いきなり校長先生から宿題が出された。「学校の中に、理科室以外に、もう一つ理科の部屋を作りたい。そこで子ども達が楽しめるような部屋にしたい。ついては明日までに設計図を作って提出しなさい」というものであった。予想だにできなかった宿題に面食らったが、一晩考え、とりあえず博物館らしきものをイメージして、学校に身近だと思われる自然素材を展示する形で、大まかなレイアウトを作成して提出した。その日のうちに校長室に呼ばれた。地学関係の展示が多いということから、「小学校1～6年生までに学習する地学領域内容の系統を1枚のペーパーにまとめて明日中に提出しなさい」と2日連続の宿題となった。一晩、指導書(文部科学省版)と格闘し、何とか翌日提出した。またもや校長室に呼ばれた。今度はどんな宿題が出るのかと暗い気持ちであったが、「よく勉強したな」の一言で終わった。今もその時のほっとした気持ちを鮮明に覚えている。最終的に、もう一つの理科室は、もちろん変更は加えられたが、私の設計図を基に「子ども科学館」という名称で実現した。

この頃は、初任者研修制度はなかったが、校長先生には、この後も、教員の在り方を中心に年間通して様々なテーマのもとに指導していただいた。ワークライフバランスに関する内容もあり、実際に職員の勤務時間を厳密に守っておられたことを覚えている。当時、他校の教員から厳しい校長で大変だと言われることが多かったが、私はあまり厳しいとは感じていなかった。多分、本気で教員を育てようとする気迫、本気度が私に伝わってきていたからだと思う。「子ども科学館」を作る際には、実際に私に任せられるとは夢にも思っていなかったが、最終的には中心になって進めることになった。先輩の先生方も、よく未熟な後輩を守り立てて協力してくださったと思う。多分、校長先生の教員を育てようという意欲・意気込みを感じていたのだと思う。私にとっては、どんな褒め言葉よりも、最後まで任され仕上げたということが、大きな自信になった。

この当時の先輩の先生方は、人から言われなくても自分のすべきことをきちんとするという姿勢が顕著で、学校における自分の役割を理解して責任をしっかりと果たしておられた。私は、細かい指導技術を教えていただくというよりは、仕事に対する基本的な姿勢や考え方を後ろ姿から学ぶことの方が多かったように思う。

今、学校では若い教員が増え、教員の平均年齢が急速に低下してきている。先日、ある校長先生が「学校に若い先生が増えて大変だ」と嘆いておられた。確かに新採用教員や経験が浅い教員が増えて、学校で教員を育てることが難しくなっていることは事実だと思う。しかし、教員の成長にとって、学校現場で様々な経験を通して学ぶこと以上に有効な方法があるとは思

ない。今のような状況の中でこそ、学校の教員を育てる本気度が試されると思う。校長自らの本気で若い教員を育てようとする気迫が若い先生に伝わると同時に先輩教員の意欲を引き立てると思う。特に教育に対する基本的な姿勢や考え方を若い時期に学ぶことは大切である。

今、学校教育の現場には多忙化解消等、様々な課題があるが、課題に応じた専門家や地域社会、行政機関等との連携を図りながら学校の教育体制を整備し、「教員は学校で育てる」という合言葉のもと、若い先生を育ててほしい、そのことが学校教育の充実につながると信じている。

小谷健一（前鳥取大学教員養成センター特任教員／元鳥取市立久松小学校長）